

RCRC

Red Cross Red Crescent
マガジン日本版 Issue 6・2015

安全の地を求めて

命の危険をおかしてまでも、安全を求めて
移動をする難民たちのストーリー

移民：何をおいても人道的な対応を

移民たちが、自国から目的地まで無事に通過
できるように、より安全で人道的な世界を
つくるために呼びかける



安全の地を求めて

安住の地を求めて

危険な海を渡り、あるいは何百キロも歩いてヨーロッパを目指してきた多くの人々にとって、一番重要なのは「安全な場所を探すこと」だ。



ギリシャのレスボス島にある仮設キャンプ、「第1レセプションセンター」は、政府への難民申請を受け付けている移民受付センターだ。そこでは何百もの家族が、未完成の避難所で暮らしながら、難民認定されるのを何日も待ち続けている。

2015年8月、ファラは混乱状態のイラクから避難するため、両親とともにギリシャのコス島へ渡った。それから毎日、彼らは難民申請が完了したかどうかを確認するため、警察署へ赴いた。(写真: ©Stephen Ryan/IFRC)

そんな待機者のひとりであるダオドと妻のライラは、アフガニスタンから避難して危険な旅を始めたとき、2人の子の命を守ることを考えていたという。

「私たちは、安全な場所で家族を育てたいのです。」

「アフガニスタンにはもう、私たちにとって安全な場所はありません。いつ銃を携えた人たちがやってきてもおかしくない状況がどんなものかは、経験した人でなければわかりません。」

彼らは今、なんとかしてドイツに行き、そこで難民申請をしたいのだという。

「ドイツは子どもを育てるのに良い場所だと聞いているからです」と、ダオドは話す。

「でも私たちは、安全で家族と一緒にいられる場所ならどこでも幸せなのです。」

そう願っているのは、彼らだけではない。レスボス島には毎日、1,500-2,000人の難民・移民がやってくる。ギリシャ赤十字社(以下、ギリシャ赤)は、第1レセプションセンターで彼らへの支援活動を行っているが、救援物資の供給は需要に追いついていない。ギリシャにやってくる人々の数は増え続けており、2015年8月に入ってから3週間だけで54,000人以上にもものぼると推定されている。

ムスタファは、彼らの仮の「家」(片側はビニールシート、もう一方の側は低いオリーブの木、そして床は

段ボールで作られている)で、自分たち家族が経験した旅について話してくれた。「私たちは、アフガニスタンからバスでトルコに来たので疲れているのですが、さらに移動を続けるためには、難民認定されるまで待たなければならないのです。」

引き返すことはできない

ムスタファはこれまでの旅について、「決して簡単な旅ではありませんでした。特に夜、海を渡るのは恐ろしい経験でした」と語る。「小型のボートには 50 人以上が乗っていました。もちろん、それが危険であることも、死ぬかもしれないこともわかっています。でも、他に選択肢はありません。引き返すことはできないのです。」

ギリシャ赤は週 2 回、450 人分の救援物資を第1レセプションセンターに届けている。しかし、受付所の外では、まだ千人以上の人々が救援物資を必要としているのが現実だ。

ギリシャは今、難民問題についてヨーロッパ最大の負担を抱えている。今年に入ってから、すでに 16 万人以上の人々がこの国にやってきた。彼らのほとんどは、エーゲ海を渡って、トルコ沿岸に近い諸島の一つにたどりついている。中でもコス島は、トルコに最も近い島の一つであるため、ヨーロッパを目指す移民を大量に受け入れている。

毎晩、何百人もの人々が、数十人ずつ小型のゴムボートに乗り込み、暗闇の中、海を渡ってくる。ボートの中は狭いので、最小限の物しか持ち込めない。当然、安全は保障されていないので、結局、小さな子どもを含む大勢の人々が、コス島に到着する前に溺死してしまう。

島では、この数カ月間にやってきた大勢の難民のため、迅速な支援が急がれた。ギリシャ赤のコス支部では、アテネから援助物資が届く前に、国際赤十字・赤新月社連盟の災害救援緊急基金から供給された資金を使って現地で援助物資を購入し、できる限りの支援を行った。

配給の初日、およそ 350 人が食料と衛生用品を受け取ることができた。また、乳幼児を抱える人たちには、毛布とベビー用品(衛生用品を含む)が配られた。「私たちは、最も緊急性の高い需要に応えられるように努力していますが、まだ十分とはいえません。より多くの支援が早急に求められているのです」と、コス地方支部代表のアイリーン・パナギオパウロは説明する。

アフガニスタンから来たハビブ・ジャアミは、コス島で難民認定を待つ待機者の一人だ。彼は、妻と、5歳の子どもを抱えた従兄家族と一緒に、トルコから海を渡ってやってきた。彼ら2家族は、アフガニスタンで身の危険を感じたため、逃げてきたのだという。「私は、アフガニスタンではニュースキャスターとして活躍していました。しかし、『してはいけない』人々にインタビューをしてしまった。その代償がこれです。



アフガニスタンのカブールから来たダオドと妻のライラは、「家族で安全に暮らせる場所を探して、2人の子どもと一緒に、ボートでトルコからギリシャ諸島のレオボスにやってきました」と話す。(写真: ©Stephen Ryan/IFRC)

だから、命を守るために逃げてきたのです」とジャアミは言う。

(文: Stephen Ryan/国際赤十字・赤新月社連盟のコミュニケーションコンサルタント)

なぜ、人々は移住しなければならないのか？



(写真: ©Stephen Ryan/IFRC)

この写真は、かつて多くの人口を抱えていた都市が大規模に破壊された様子を表しているが、これを見れば、なぜこれほど多くの人々が安全を求めて故郷から逃げたのかがよく分かる。それは当然、紛争が繰り広げられているからだが、それだけではなく、それらの紛争が国際人道法の基本的な条文

とは明らかに矛盾したやり方で行われているからである。

国際人道法によれば、たとえば一般市民を標的としてはいけないし、交戦国は保健施設や上下水道

設備のような生命を維持する設備はもちろん、民間の建造物にも損害を与えてはいけいとされている。にもかかわらず、人口が密集した都市やその近辺で、殺傷力の高い爆発性の武器を無差別に使用すれば、何千人もの命が奪われるだけでなく、今後長年にわたってその地域には住めなくなってしまうのである。

紛争の性質

「明らかな国際人道法違反のせいで人々が避難せざるを得なかった、という事実を示す正確な調査結果があるわけではありません。しかし実際に、人口が密集した地域で殺傷力の高い武器を使った戦闘が行われている以上、世界中で起きている大規模な避難・移動に対して支援を行うべきであることに、疑いの余地はありません」と、ピエール・ジェンタイル ICRC 保護局長官は述べている。

この移住現象は、イラクやレバノン、トルコといった周辺諸国に、シリア紛争の脅威を感じさせている。現在、レバノンで暮らす難民の人数(110 万人にものぼる)は、全体人口のおよそ 5 分の 1 に等しい。国連の調査によれば、シリアからの難民は約 170 万人以上がトルコに、約 65 万人以上がヨルダンで避難生活を送っているという。

新たなジレンマに直面するアフリカの角

アデン湾は長い間、移民にとって最も危険な場所の一つであり続けてきた。イエメンで新たな紛争が勃発した現在、ソマリアからイエメンへという従来の移動パターンは逆転し、新たな人道問題となっている。

イエメン西部のシュマイリで暮らしていたアミナと家族は、今年初めに15日間続いた爆撃の後、街から避難することを決めた。「私たちはもう、銃声には慣れていました」と彼女は言う。「そしたら、銃声の後、雨のように爆弾が降ってきたんです。逃げる場所も身を隠す地下シェルターも破壊されました。家族の安全のためにイエメンを脱出するしかなかったんです」



イエメンでの紛争が激化し、人々はソマリアへ戻らざるをえない。ゼイナブと子どもたちはソマリア赤新月社の支援を受けている。(写真:©Mohamud Miraj/ICRC)

アミナを含め何千もの人々が、イエメンの紛争から逃れるため、危険を冒しながらもソマリアを目指してアデン湾を渡り、およそ 260km を移動した。しかし、一方でソマリアも、20年にわたる内戦と周期的なひどい干ばつに苦しんでいる。

皮肉なことに、状況は逆転し、悲劇的な局面を迎えている。イエメンは長いこと、紛争や貧困から逃れようとするソマリア人にとって希望の地であった。というのも、イエメンでは難民の資格を申請できたし、あるいは、そこからさらに安住の地を求めてサウジアラビアへ向かうこともできたからだ。

イエメンの紛争が年を追うごとに悪化すると、多くのソマリア人が帰還し、イエメンからの難民申請者がソマリアへと向かうようになった。

「銃声と爆発は激しさを増し、戦闘は自宅のドアのすぐ外で起きていました。安全を求めて避難する以外、選択肢はありませんでした」と話すソマリア出身のゼイナブ。紛争と貧困から逃れるためにイエメンに避難したが、2014年に戦闘が勃発すると、ソマリアへの帰還を余儀なくされた。

イエメンでの紛争が悪化するにつれ、多くのソマリア人が自国に戻った。時にはイエメンからソマリアに庇護を求めて逃れる人々と同じボートに乗ることもある。

ソマリア出身のゼイナブは、3人の子どもを連れてイエメンを離れ、ソマリアの港町ボサソに辿り着いた。「子どもたちに朝食を用意していました。でも結局は食べずじまい。発砲や爆発が激しくなって、ドアの前でも戦闘が起こるくらい危険な状況だったからです。身を守るためには逃げるしかありませんでした」

ソマリアの主要な港であるソマリランドのベルベラとプントランドのボサソには、ソマリア人帰還者とイエメン人の庇護申請者を乗せた船が次々と到着した。中には1000人乗せている船もあった。

どちらの港でも、赤十字国際委員会(以下、ICRC)が、わずかだが食料と生活必需品を配り、ソマリア赤新月社のボランティアは、必要最低限の応急処置ができるよう24時間態勢を取っていた。イエメンやソマリアなどにいる親戚と連絡が取れるよう、新たに到着した人全員に電話が無料で提供された。

ゼイナブは混乱の中で夫と連絡が取れなくなっていたが、ボサソに来てから、ソマリア赤新月社のボランティアの手助けによって直接話をする事ができた。「とても心配だったんです」と、ゼイナブは言う。夫からの連絡が1カ月以上も途絶えていたからだ。「夫の声を電話越しに聞いて、ようやく生きていることがわかったので安心しました」

ソマリアの北に隣接するジブチでも、同規模の移動が行われている。この国ではイエメン人難民や、移民としてイエメンに長年暮らしていたエチオピア人などを受け入れている。

移民の主要な受け入れ口であるジブチやオボックの港では、ジブチ赤新月社が「自分の無事をイエメンに残る家族に伝えたい」という人々に無料で電話を提供している。しかし一方で、イエメン国内の状況の悪化に伴い、ボランティアやICRCスタッフは、イエメンにいる人々に赤十字通信(近況を書いた

手書きのメッセージ)を送ることができずにいる。

「ICRC チームはソマリアで、離散家族再会事業(以下、RFL=Restoring Family Links の略)を実施するだけでなく、イエメンから避難してきた人々に、ICRC が対応できるようなニーズや関係機関に対しての要望があるかどうかを調査したかったのです」と話すのは、ICRC の保護活動の責任者としてソマリアで RFL を統括しているアーメド・ザロウグだ。

ザロウグは「保護者と離れた子どもたちには彼ら特有のニーズがあるはずですよ」と指摘する。「彼らは、悲惨な状況を目にして心に深く傷を負っているのです。中には、病気にかかっていたり怪我をしている子もいます」

(文:Rita Nyaga/Miraj Mohamud)

■Rita Nyaga…ナイロビに拠点を置く ICRC ソマリア代表部で経済の安定を担当するアシスタント

■ Miraj Mohamud … ICRC ソマリア代表部の広報アシスタント。ICRC ソマリアのブログ (blogs.icrc.org/Somalia)に寄稿している

世界的な現象

2015 年 5 月、バングラデシュやミャンマーからの移民 561 人が、インドネシアのアチェ沿岸に漂着し、地元の漁民に保護された。彼らは違法な人身売買業者によって船に乗せられ、3 カ月もの間、わずかな食料と水、シェルターしか持たずに、行く当てもなくアンダマン海を漂流していたという。岸にたどり着くほどの体力が残っていた者はほとんどいなかった。

現地でパラシメラ・インドネシア(以下、PMI)と呼ばれるインドネシア赤十字社の北アチェ支部に所属するスタッフ、アーメド・ヤニは「子どもを含め、ほとんどの人が本当にひどい状態で保護されました。健康面の問題は、脱水症状から精神的なトラウマにまで及んでいました」と話す。

海岸からそう遠くない安全な場所へ移民たちを移動させた後、PMI は応急処置と医療サービスを行うために、現地の医師団体と協力して健康センターを設立した。PMI のボランティアたちは野外炊事場を設け、1日3回、全ての人々に食事を提供している。

1週間に 1800 人以上もの移民が東スマトラ沿岸の各地に到着する。その状況を受けて、現地政府も 6 カ所にシェルターを建設。PMI も衣服や毛布、乳児用品一式を届けたり、健康や衛生管理に関する啓発活動や、母国の家族と連絡を取り合えるよう RFL を実施したりしている。

非常に危険なルート

東スマトラ沿岸に上陸した移民のように、危険なルートを通して移動する人は少なくない。東南アジアでは、紛争や迫害、貧困、自然災害の余波から逃れるため、多くの人々がオーストラリアやインドネシアを目指してボートに乗り込む。何百もの移民を乗せたボートがどこかに上陸するか、あるいはインドネシアやマレーシア、ミャンマー、タイの領海で捕えられている。もちろん陸路でも多くの危険が伴うことに変わりはなく、2015 年 5 月にはマレーシア当局が、ミャンマーからの移民を売買していた業者が使っていたと思われるキャンプ跡地周辺で、多数の墓を掘り起こした。

船での国境越えで最も危険な場所の一つはアデン湾で、安住の地を求めてアフリカの角を去る人々が使う長年のルートだった。今は逆のことが起きていて、イエメンからアデン湾を渡る人が増加している。世界のメディアには注目されていないが、同湾では海洋事故が頻発していて、2015 年 2 月には、小型漁船で海を渡ろうとした約 35 名が行方不明となっている。国際移住機関によると、国境越えのルートのうち地中海の次に危険なのがここ東アフリカだとされている。

移民:何をおいても人道的な対応を



(写真: ©Carlos Spottorno/Panos)

赤十字および赤新月社は、苦境に置かれた移民に対して、世界的な規模で支援活動を行っている。それが今年イタリアで撮影された2枚の写真が脳裏に浮かぶ。1枚目は、1人の少年がイタリア赤十字社のボランティアの手に引かれて、イタリアの港町カタルーニャに上陸しているところである。2枚目は、幼い子どもがローマにあるイタリア赤の移民キャンプでボランティアたちと遊んでいる写真である。

私は、彼らの今後を思い描いてみた。旅の途中で、オーストリア赤十字社のボランティアは手を引いてくれるだろうか。彼らの家族がこれからどこに向かうのかはわからないが、ドイツ赤十字社から食事をもたらったり、市民団体に治療を受けることができるだろうか。おそらく彼らは、ヨーロッパに上陸する前も、そのような活動によって助けられてきただろう。

ヨーロッパで過酷な旅をしてきた移民たちの移動ルートに沿って、またその先で、赤十字社や市民団体は、前線での支援活動や特別な配慮による対応を行ってきた。それによって、移民はどれだけ助けられていることだろう。人々が避難しなければならない理由が何であれ——紛争や迫害、貧困、自然災害のどれであったとしても——人道的に扱われなくてはならないのだ。

幸い、世の中の多くの人々がこのように考えて、絶望しながらも生きる移民たちの写真やニュースに心を動かされ、疲労と飢えに苦しむ彼らを救おうと、援助活動を行っている。

今年初め、1枚の写真が世界中の人々の心を動かした。それは、アイラン君という1人のシリア人の少年が、トルコとギリシャの間の海で溺れている写真である。この悲劇的な情景は、多くの人々の良心に訴えかけ、より一層移民への共感を喚起し、世論の流れを変える手助けとなった。その結果、移民政策を改善する国々もでてきた。

とはいえ、国際レベルでの議論ではいまだに、なぜ人々が移動しなければならないのかを理解し、長期的な解決策や人道的な対応を考えるよりも、国境を警護することの方が重要視されがちだ。爆撃によって破壊された都市から避難したり、迫害や飢餓、自然災害の余波から逃れてきた人々は、安全な暮らしを求めているのに、移住が法的に制限されてしまえば、より危険な方法で移動せざるを得なくなってしまう。

今年初め、赤十字は人道保護キャンペーン(#ProtectHumanity)という活動に着手した。その活動は世界中の人々に対し、すべての移民に対する保護と尊厳ある対応を求める活動である。私たちはこの呼びかけについて、2015年12月にスイスのジュネーブで開かれる赤十字社および赤新月社の国際会議(人々の苦しみを減らすための重大な人道的関心事項と具体的な提言を議論するために4年ごとに開かれる国際会議の第32回目)で提起する予定だ。

移民の置かれた状況に対して、私たちは何をすべきなのだろうか？ 政府は彼らの法的地位にかかわらず、すべての移民の安全と幸福、尊厳を保護するための必要な措置を取らなくてはならない。私たちはいつでも、移民に対して人道的支援を行わなくてはいけないし、海で遭難した人々を捜索・救助する準備をしていなければならないし、人身売買の犠牲者を保護・支援しなければならないのだ。

難民申請者が難民認定されるためには、公正かつ効果的なプロセスを踏まなければならない、医療処置や、家族と共に留まる措置も受ける必要がある。一方で公的機関は、移民に対する暴力や外国人排除の動き、差別に対して明確に抗議の意を示さなければならない。そして、どんな立場にある人でも、移民が移動せざるを得ない根本的な原因に対する政治的、経済的かつ社会的な解決策を見つけるため、移民に協力しなければならない。

国際的な人道ネットワークとして赤十字の支援活動は、慢性的に不安定で、紛争や貧困、自然災害が人々に多大な苦痛をもたらして人々が避難せざるを得ないような国々で行われている。つまり、どこであっても、弱い立場に置かれた人々の苦しみを防ぎ、減らし、保護するために活動できることはたくさんあるということだ。

私たちは、今以上に効果的な活動ができるように、みんなで協力し合わなければならない。移民たちが、自国から目的地まで無事に通過できるように。私たちは、危険な移動を続けなくてはならない絶望を解消し、難破事故や溺れた子どもたちの悲惨な写真がない世界をつくることもできるのだ。#ProtectHumanity または www.ifrc.org/protecthumanity の嘆願書に署名して、より安全で人道的な世界をつくるために呼びかけよう。

「私たちは、今以上に効果的な活動ができるように、みんなで協力し合わなければならない。移民たちが、自国から目的地まで無事に通過できるように。」

フランチェスコ・ロッカ

(文: Francesco Rocca/イタリア赤十字社の社長であり、国際赤十字・赤新月社連盟の副会長)



イタリア赤十字社社長 フランチェスコ・ロッカ
(写真: ©Giovanni Zambello/IFRC)